No.21 たにがしらっ子だより

令和３年 10 月 27 日(水)
金丸恵美子

ワクワクフェスティバルを終えて

先日のわくわくフェスティバルのご参加ありがとうございました。熱望した通り園庭で、日頃の子ども達の遊びの延長をご覧いただけたと思います。

さて、これからの園庭での遊びですが、ワクワクが終わったからプッツンと切れるのではなく、子ども達の挑戦や運動遊びは、続いていきます。その影響を与えるのはもちろん５歳児すみれ組の子ども達です。ひたむきに自分の目標に取り組んでいた姿を、３歳児、４歳児は見ていました。だから「すごいな！」「かっこいいな！」「僕も〇〇君みたいになりたい」と言う気持ちが湧いてくるのです。

憧れの存在のモデル(5 歳児)が、たのもしく優しく、時には厳しく年下の友達に接してくれるはずです。この５歳児の子ども達もまた、卒園したお兄ちゃんお姉ちゃんの背中から学びとったに違いありません。谷頭の子ども達には、この強い伝統が根づいています。年長児の後半は、特に友達と関りながら自分たちで考え、成功と失敗を繰り返しながら一回り大きく成長することでしょう。これからのすみれ組の子ども達から目が離せません！！

②凸凹の庭が育む「自分の力」

前回の便りで、凸凹の庭が育む子ども達の力についておしらせしました。見学先の「広島大学付属幼稚園」は、傾斜の強い裏山があり、そこで子ども達は木登りやターザンロープ、やぐらやツリーハウスなどを自力で登っていました。かなりの運動能力でした。社協３園の子ども達をあそこに連れて行けば、ためらいなく遊ぶはずです。裏山のサルに例えるくらい、その自然の中での遊びをうらやましく思いました。できればそのようなところで遊ばせたい…。しかし、現実は難しいです。だから、庭に木をもっと植え、上ったり高所を横移動できたり、降りたりの環境を作りたいのです。イメージはジャングルのような庭です。私の世代は、このような経験が自然の中でできていました。いつも野山や川で遊んでいました。しかし、今は時代が許さないところが多くあります。園の庭は、このような冒険的な遊びができる最後の砦です。来年度から 2～3 年の計画で庭をより凸凹の環境にしていこうと思案中です。

原体験を子ども達に…。

20 日(木)に高崎町縄瀬の高崎川の河原で、ウナギなどの稚魚を放流する会に参加しました。これは、宮崎県内水面漁業協同組合が川の生き物を増やしたり川を中心とした環境改善の学習の取り組みをされているものです。社協３園にお声をかけてくださり、今年で３回目になりました。

会長さんから魚を放流する意義などの話を聞いて、子どものひざ半分もない浅瀬に魚を放します。最初がにょろにょろのウナギでしたので、戸惑う子どももいましたが、すぐに水の中に足を入れることができました。コイやフナ、モズクガニ(ヤマタロウガニ)も放流。放した魚やカニをまた、捕まえたり…。みんなでかけっこもしました。石がごろごろしている川の水面を蹴散らしながら一斉に走る。誰一人転ぶ子どもはいません。そのうちに腹ばいになって水の流れに身を任せたり、腰まで浸かって座り込んだり。全員がライフジャケットを着用し大人が見守る中に大盛り上がりでした。

着替えは、シートを覆いその中で。水道のない田んぼ道でスプ濡れの衣服を着替えます。替えの靴に履き替えるときに、足が汚れないように草の上を歩く。園や家とは違い、自然の中では不十分なところで自分の身の周りのことをしなければなりません。しかし、毎日が泥んこや水に触れる環境にあり、汚れることをものともしないことが、このような時に発揮されます。川砂が靴に入ってくる、大小の石がごろごろしている川の中を転ばず歩く。おおげさですがこれが「生きる力」なのだと思います。私は、この日一日子ども達を見ていて逞しいなと思うことでした。しかし、谷頭の５歳児さんもやはり現代っ子。便利な環境の中で育っています。

子ども達が生きていく時代は、AI が主流になり自然災害や環境や、格差社会など多くの課題を乗り越えなければならないと言われています。それらに立ち向かい解決するのは人です。人としてのつながりを大事にできる人やコミュニケーション能力の高い人が求められます。その人としての基礎の部分を育てるのが幼児期。この時期に原体験ができることは大きなカギになると思うのです。園庭でのこれから先は、水や土はもちろん。火を使ったり、刃物を扱う遊びも多くなります。人としての生活の根本を経験して欲しいと思います。

通し番号に間違いがありました。前回(来年度の入園案内)のはNo.20 です。訂正してお詫びいたします。